

公共的空間の評価構造に関する基礎的研究

李, 静雅

<https://hdl.handle.net/2324/6787626>

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 李 静雅

論 文 名 : 公共的空間の評価構造に関する基礎的研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

公共的空間は、魅力的な都市をつくるために必要なものとして注目が集まっている。都市における公園のような公共的空間は、都市生活者の多様で自由なアクティビティの受け皿として、都市や地域の活性化に貢献する極めて高いポテンシャルを持っている。近年、公園の利活用の改善策として、周辺の公共的空間や商業施設との連携がみられ、賑わいの創出により周辺エリアや地域への愛着や快適性などのイメージの向上がもたらされると考えられる。

利用者側からみると、公共的空間や商業施設などは、いくつかの選択肢の中からどれを選択して利用するかという意思決定が必要となり、利用場面によってニーズが異なれば異なる空間を選択して利用すると考えられる。そのようなニーズを把握して空間設計を行うためには、利用場面ごとの評価構造を表現したものがあるとよいと考えられる。

讃井らが提案した評価グリッド法は、建築学をはじめ、都市計画や商品開発における評価構造の抽出に幅広く活用されている。しかし、評価グリッド法を本研究の対象である公共的空間の評価に応用するには、相互に関連した二つの問題があると考えられる。一つめは、回答者に場面想定をまかせて抽出した評価構造は、回答者が想定した場面に限定された評価構造の一部にすぎない可能性があるが、想定された場面が不明ことである。そして二つめは、場面ごとに異なる可能性のある空間に対する評価構造全体を把握しようとする場合には、個人の中でも多様な利用場面に応じて生じる可能性のある違いを包括的に考慮した評価構造の抽出方法を探る必要があることである。

そこで本研究では、公共的空間を対象として利用場面を想定して抽出した評価構造の比較考察を行い、上記の問題に対応した新たな知見を得た。また、抽出した評価構造をもとに、公共的空間に対するニーズのチェックリストを提案した。

第一章は、本研究の背景と目的、関連する既往研究について述べた。筆者らが行ってきた研究を整理し、本研究に至る経緯を述べた。また、公共的空間に関する研究や、評価グリッド法が提案された経緯、関連する概念、評価構造に関する研究を整理する。そこで、本研究で扱っている研究対象とした評価構造と公共的空間を定義し、設定した課題を述べた。

第二章は、調査方法について述べた。本研究では、利用者のニーズを把握するための評価構造を抽出する手法として、半構造化インタビュー手法である評価グリッド法を用いた。評価グリッド法に基づき、利用場面を指定せずに行われた調査と利用場面を指定した場合の両方の手順を説明した。調査対象はさまざまな場面で利用できる公共的空間であり、ある程度共通認識がある公園とカフェを設定した。調査対象者は、ある程度経済的・精神的に自立しており、相対的に時間が自由に使える行動範囲が広いと考えられる大学生と大学院生とした。利用場面を指定せずに行ったインタビューは利用したいかどうかを基準に評価してもらった。利用場面を指定して行ったインタビューは、利用場面を一人で利用する場合、家族と利用する場合、友達と利用する場合、恋人と利用する場合

の4つに設定した。

第三章は、インタビュー調査により得られた結果を述べた。評価グリッド法によるインタビューの結果として、まず回答者ごとの評価構造図を作成した。利用場面を指定せずに得られた評価構造を個人を単位に説明し、個々の回答者が求めるものを整理した。13名の回答者中、2名の回答者が複数の利用シーンを想定しながら回答したことがわかった一方、多くの回答者が空間の要素に対して評価したが、具体的にどの場面を想定して利用するかについては、評価構造図からは判断できなかった。利用場面を指定して抽出した評価構造の分析については、まず、回答者全員の評価構造図を利用場面ごとにまとめた全体評価構造図を作成し、比較した。そこで、一人で利用する場合は「程よく閉鎖的」、恋人と利用する場合は「ロマンチック」といった特有項目がみられ、項目間のつながりは利用場面によりやや異なっていることが見られた。次に個人評価構造図を個人内と個人間の比較を行った。それぞれの比較には、評価項目とつながりの相違についての比較を行った。比較結果として、同じ回答者でも利用場面によって類義だが異なる表現がみられたほか、利用場面により対照的な意味を持つ項目と同じ項目に対して関連させる回答がみられた。類義だが異なる表現については、例えば「会話」に関する表現として「団欒できる」「おしゃべりできる」が挙げられ、同じ会話という行為であっても、異なる表現が使われていることは回答者ニーズに違いがある可能性がある。また、対照的な意味を持つ項目については、一人で利用する際には「狭い」が「落ち着く」とつながっているが、家族と利用する際には「広さがある」が「落ち着く」とつながっているというような回答が同じ回答者の評価構造の中にみられ、個人の中でも利用場面によって求めるものが異なる場合があることがわかった。さらに、同じ表現の項目が上位・下位とのつながりから異なる意味で使われていると思われるものがみられ、回答者の意図を理解するには、関連する項目から汲み取ることの大切さが示唆された。

第四章は、評価グリッド法により得られた結果に基づき、利用場面ごとに多く出現した項目を集計し、利用場面の間に見られたニーズの相違を把握するためのチェックリストを提案した。チェックリストの評価項目は全体評価構造図の中で他の項目とのつながりが分かっているため、全体評価構造図からチェックリストにある項目ごとに、抽出した項目とつながっている項目を示す補足資料を整理した。このチェックリストは公共的空間における利用場面の間に見られたニーズの違いなどのデータに基づくものであり、利用場面を考慮した設計に有用であると考えられる。

第五章は、結語として本研究全体にわたって調査結果から得られたものをまとめた。また、今回の調査の限界を述べ、今後への展望を述べた。本研究は、多様な利用場面に適用できる空間に対し、評価構造の抽出方法や評価構造の比較を検討した。今回の調査により、公共的空間における評価構造の把握に利用場面の指定が必要な場合があることを示した。今回の調査対象の公園やカフェは、さまざまな利用場面で利用できる公共的空間と想定されるが、利用場面の間にみられたニーズの違いやニーズの把握方法そのものが設計場面で活かされることで、より多様な人々のニーズを満たす公共的空間のデザインにつながると考えられる。